

日本語教育実践研究 (11)

—「聴解教育」の実践—

担当教員 吉岡 英幸

日本語教育実践研究(11)は、聴解教育について、実際の日本語聴解クラスにおける教育活動を通じて、教材作成や具体的な指導の方法などを研究するための授業です。主として中級から上級レベルの私が教える日本語聴解クラス(聴解6Aクラス)を実習の場として、クラスの参与観察や授業の一部の指導を担当します。

2005年春学期の聴解6Aクラスの登録学生は17名で、クラスの主な目標は、

- 中上級語彙の習得(講義などで使用される書き言葉的表現や、ややくだけた話し言葉も含む)
- ニュースなどの正確な聞きとりと再生
- まとまった話(講義を目標とする)の要旨把握
- 未知の語の推測

としました。使用教材はビデオとし、主にNHKの「首都圏ニュース」から選びました。学期の前半は2・3分の長さの首都圏リレーニュースを、後半は8分前後の特集から選んだものを使用しました。

受講生は14名で、三つのグループに分かれ、グループで教材作成と授業の指導案作成を行いました。グループ作業はまず、手分けをしてテレビ番組を録画し、選んだものを持ち寄って適当かどうかを検討します。教材としての候補が決まると、教師がチェックして採用できるかどうかを最終的に判断します。教材が決まると正確なスクリプトを作成し、具体的な授業の指導案及び必要なワークシートなどを作成し、それを教師がチェックして完成させます。そして、その教材を使用する授業のとき、担当グループが授業の1部の指導を分担します。指導部分は、学期の前半は新出語彙の意味説明などが中心でしたが、学期の後半には発展練習の部分を担当しました。

受講生は全員、毎週参加した日本語クラスの授業についてレポートを書き、提出することを義務としました。そして、教師はそれをチェックし、質問に対する回答など、説明の必要なことについては、翌週の実践研究の授業でフィードバックしました。そして、学期末には、体験した実践研究についてのまとめをレポートとして提出することを課題としました。その中から聴解授業の趣旨、実態、特色がよくわかると同時に、聴解指導についての自分の考えを明確に述べたものを4篇選びました。これからの聴解授業の研究資料として活用されれば幸いです。

(ヨシオカ ヒデユキ・日本語教育研究科教授)